

特54  
874 特65

新盛館編輯部編纂

高等小學讀本字引

新制第三學年前期用

明治  
44. 3. 3  
內交



### 例言

一本書は新制の高等科第三學年の讀本中にある文字や語句の解しがたきものを拾ひ、たやすくわかるやうに説明した字引であります。

一諸君はすでに高等の第二學年を了つて、小學校の全部は残らず修め得たもので、いはゞ中學校程度の諸君です、さればその讀本の事實も高尚になり、隨つて解説にくるしむことも多いのは自然の道理であり

ます、すべて書物を讀むに文字や語句が通じかねては、全體の事實がわからず、全體の事實がわからずは、讀むも蛙鳴蟬噪で効のないことです、この書はその憾を除かんためにしたもので、かならず瑣々たる一冊子と見ることなきを望むことであります。

一後期用には附録として諸君が將來にたける國民の義務を知らさんために、たもふまゝを掲げました。また國民としての少年たる本分を知るに資せられんこ



ごをのぶむのであります。

明治四十四年立春前二日

編者識

第一	大和心	一
第二	櫻	三
第三	土筆を贈る文	五
第四	都會ト田舎	七
第五	白石少佐を憶ふ	一一
第六	敵襲	一六
第七	寓言二則	一七
第八	フリードリッヒ大王と新兵	二三
第九	近世文章の變遷	二四
第十	近世文章の變遷	二六

○目次



第十一課	智慧は小出しにすべし	三三
第十二課	佐夜の中山	三五
第十三課	野蠻人ノ智慧	三九
第十四課	源平時代の武士	四一
第十五課	鎌倉の海	四一
第十六課	問答の歌	四六
第十七課	熱情を抑制すべし	五〇
第十八課	眞の勇者	五一
第十九課	岩倉公の逸事 (一)	五三
第二十課	岩倉公の逸事 (二)	五九
第二十一課	東郷聯合艦隊司令長官海戦經過奉告	六六

高等小學讀本字引 新制第三學年前期用

新盛館編輯部編纂

第一課 大和心

敷島シキジマ 日本のニホノ 大和心ヤマトゴコロ 日本人のこころがけ  
 尊王ウヂノミヤ 家の名だイヘノナ めでさるめでさる 愛せあいせ 三十一字三十一ジ 字のたの文ジノタノブミ 歌ウタ 盡ツク じじ 本居宣長モトヤリノブナガ 國學クニガク 者モノ 以ヨリ てテ

だけだけ いていて 大和魂ヤマトタマシヒ 發揮ハツキ しし めめ するする そそ もも くく 遠トホ つつ 祖ミオヤ  
 おほむかしおほむかし のの せんぞせんぞ 氣象キキョウ 家イヘ をを 顧カヘリ みみ ざるざる 精神セイシン やや くく せいせい ねね さいさい ふふ ここ ろろ がが けけ

○高等小學讀本字引 第一課 大和心



固モトよりもち 戴イタけるかしらに 外ホカならざればそれよりほかに 形ケイ

容ヨウ得エたりやあらずやできたのであらうかどうであらう 試コトみにため

躍ヤク如ジヨたるおどりが 咲サきニホ匂ニホふ。いさぎよしさつぱりさや

がてミほさりもなな 懐イダけるこころにも 仕ツカへむか君にほうこう 愛アイ國コクの

人ヒトつわが國をたいせ げにやまにこ 盛サカは。こま 朝チヨウ鮮センのもろこし

清國チヨウすなはち いふも更なりいはすとも 西ニシの果 西の方のその おの

づからんしぜ 靡ナビき伏しなむわれからしたがつ 大和男兒ヤマトノダンジ 日本の男兒

苟イヤシクもかりそ 失ウシナはむには なくなし たらば あらぬなりつである一 維ヰ

持ヂするもつなぎ なほや、もすればまだ何か 心浮ウかされ

てそのこころが 其のよるこころを知らず わがたよるべき 大

和トの花を忘れる 日本の花はこれであ 朝アサ日ヒの匂を忘れし ひの

徒イタツラになんさいふ 外國トクの花をのみめではやさ

むこするは如何カに西洋セイヨウの花ばかりを愛アヒせんぜ 顧みるべきこ

こならずや よくかんがへてみる べきこころではないか

第二課 櫻

植シヨク物ブツ 優イウ美ビ やさしく 賞シヨウ愛アイ ほめかあ 仲チユウ春シュン はるの 貴キ賤センの別な



く たつと きさき、い やし 舉つて われも く 主として 賞観し ももの

吹く 風の 勿來の 關 源義家が奥州の勿來の關をこゆるときによみ

波のこゝ、滋賀の都は近江國にありし都のこゝ、平忠度といふ人の歌に「さゞ 聯想し

實染井吉野 今もなほ 澤山 彼岸櫻 枝垂櫻 其の

來た 園藝上の變種 松岡玄達 櫻品 載せて 普通

楊貴妃櫻 普賢象 濃艶 鬱金櫻 黄色

を帯び 句櫻 著しい 詠んだ 和歌 在原業平 たにて

數へ 擧げる 單に 在 業平 たる

櫻の なかり せば のが なかつた なら のどげ から まし

へ 様のない 程立派 である 適當 であらう

さう した たら ば した い こと なら 適當 であらう

第三課

土筆を贈る文

○高等小學讀本字引 第三課 土筆を贈る文



この手紙の文は、東京からいなかへひきこもりし人より、東京の友だちのまゝへ土筆をおくること、そへておくりし文なり

土筆ツクシ 春三月のころに、野原に生ずる草にて、食ふべきもの  
都ミヤコの空ソラは如何イカばかり打霞ウチカスむ

らん 東京の方は、どれほどに春の時候トキとなつたことであらう  
我ワが山ヤマ里ザト 松マツの白雪シラユキ打ウチ

解トけ 松マツにつもりし雪ユキ  
引籠ヒキコモりし事コトなしの朝夕アサユフ

山ヤマの姿カタ あたりの人ヒトの心ココロばへ  
文フミさし出ダさん

慰ナグチめて 過スゴし居イりてなる  
文フミさし出ダさん

人走ヒトハシらせ 住家スミカに歸カらんことさへ  
文フミさし出ダさん

佗ワびてよわ 住家スミカに歸カらんことさへ  
文フミさし出ダさん

ぐ 頭の惱ナヤましき事コト露ツユばかりもなく

打霞ウチカスむやうなりし眼メさへ

見渡ミワタされ 悉コトヘく病ヤマヒなき身ミ

摘ツみ。小川チガハの根芹ネゼリ 岡ヲカの嫁菜ヨメナ。せ

まほしき 趣オモムキさまぐ 手テ提サゲの籠カゴに溢アフ

如何イカにもして 御覽ゴランに供ソナへ度タク

事コトの序ツヒデめきて 思オボし許ユルし給タマふやと奉タテマツり候カ

鄙ヒナびてあやうけれど かなかめきてかゝる



をこそは このやうな 思し汲ませ おぼしめし、お

第四課 都會ト田舎

都會 トクワイ 對シテ タイ 恐ラク オツ 異ナルベシ コト

であ ラウ タマ アダカ 繁華 ハンクワ 驚き オドロ 居ツキ イ タシ マ

たい ア 恰モ アダカ 反對 ハンタイ 或ハ アルヒ 長閑 ノド ケサチ ウラヤ 羨ム ウラヤ ベ

シ ウ のご ウ かな ウ や ウ う ウ す ウ を ウ トモス ウ レ ウ バ ウ や ウ も ウ 餘所 ヨソ ノ ウ 境遇 キヤウグウ 餘所 ヨソ ノ ウ 境遇 キヤウグウ 餘所 ヨソ ノ ウ 境遇 キヤウグウ

ニヤ ニ ヤ ヤ 街路 ガイロ 四通八達 シツウハツタツ 蜘蛛 クモ ノ ウ 巢 ス ノ ウ 如ク ゴト

には ニ は ハ り リ が ガ れ レ が ガ 、 ウ た タ て テ よ ヨ こ コ 大廈 ダイカ 高樓 カウロウ 鱗次 リンジ 櫛比 シツビ ス ウ の ウ の ウ や ヤ

う ウ に ニ な ナ ら ラ び ビ 、 ウ く ク し シ の ノ 晝 ヒル チ チ 欺 アガム キ キ 絡繹 ラク ト ト シ シ テ テ くる ク ま マ や ヤ う ウ

カウ カウ ジン ジン 行人 カウジン 絶 タ ム ム ム ム コ コ ト ト ナ ナ シ シ 送達 ソウダツ 迅速 ジンソク 送達 ソウダツ 迅速 ジンソク 送達 ソウダツ 迅速 ジンソク

る ル 瞬 マタ ク ク ヒ ヒ マ マ 通信 ツウシン ス ス 運 ウン 輸 ユ 備 ソナハ ラ ラ ザ ザ ル ル

ナ ナ シ シ 劇場 ゲキヂヤウ 百 ヒャク 般 パン 諸 モロ ノ ノ 娛 ユク 樂 ラク 供 キヤウ

給 キフ セ セ ラ ラ レ レ ザ ザ ル ル ハ ハ ナ ナ シ シ 要 ユウ ス ス ル ル ニ ニ 生 セイ 活 クワツ 給 キフ セ セ ラ ラ レ レ ザ ザ ル ル ハ ハ ナ ナ シ シ 要 ユウ ス ス ル ル ニ ニ 生 セイ 活 クワツ

た タ 宜 ムベ ナ ナ リ リ 苦 ク 勞 ラウ 不 フ 愉 ユク 快 クワイ 物 ブカ 價 カ 貴 タツ ケ ケ レ レ

バ バ 交 カウ 際 サイ 繁 シゲ ケ ケ レ レ バ バ 忙 イッ ガ ガ シ シ ク ク 騷 サウ ガ ガ シ シ

ク ク 雜 ザツ 踏 トウ シ シ 不 フ 潔 ケツ 總 ソウ シ シ テ テ 傳 デン 染 セン 病 ビヤウ 流 リウ



行カウはや チウミツ稠密ノ地チをいへのつんで マシテヤクワサイ火災クワサイじくわ 危キ

險ケンあぶ キヨ清キ眺ナガメト。人情ノ淳ジユン朴ボクで、さりがさりが無い セイ清爽セイよ

く、さつば モト求メ ガタ難キ賜タマモナリ ニにいれることのなりか ワワラビ取リ

蕨クサさいふ草 タケ茸狩ガリ。螢ホタル狩ガリをさる タノシ樂ゾカシタノシたのしみ ベシカレノ便

利リ都會ベのベ ココレノ カ代フ。優マサレリトモ定サダメ ガタ難シサま

つてなることも トボ乏シケン ソ其ノ失シツテ償シクナウテ餘アマリアル

ベシ タ絶エズタ キ利器キつは キ機關クワン

ぐだう アツカシコニ集マリ マツタ全ク之ニ反ハシス マまるでこれと

るあ チ知見ケンヲ廣ヒロメ チ技能ギケンヲ磨ミガカント欲ボツスル者モノ

わさや、はたらきをみ トウ到底テイも ト止マルコト能アタハザルベシ

さまつてなること コ此ノ點テンこのこ ミヤコ都ヲ優オサレリトス ミヤみやこがまさつ

修業シユゲフノ地チ アン安住ヂウすまゐる セイ靜慮リヨおもふ ハルカ遙ニ優マサレ

リ ヨよほごまを オモ憶ふ

第五課 白石少佐を憶ふ

烏江ウコウ水淺ミツアサクシ能往ニスホク、ユク一片イツ義心ベノギ不可東シンヒガシスベカラズ

は河の名で、この河の水があさいから、わがのれる難さい馬はよくわたりゆく、さればに



むかつて烏江をわたり、にげることはならぬ、義のあること  
ころには、いのちもかへりみずしてゆくべしとのころる  
別辭べつじのこまごひ 簡單カンタン

閉塞船ヘイソクセン 旅順のみなご口を 最後サイゴのちばん 淺間アサマあさま 側ソバ 彼カレ

白石少佐 手旗信號テノハシグナル であいつはた 確タシメにきつ 發揚ハツヤウすべし 予ヨ八代

大佐の 懇意コンイ やすく 武勇ブウ 二 徹テツひさましい 酷キビしくの 自制ジセイを加クハ

へるをおさへつける 終ツビにさう 温厚オンカウの長者チヤウジャ おだやかな 本艦ホンカン 淺間の

青年士官セイテンシクワン しくわんの 指導シダウを彼カレに託タクしたのんだ しかのみ

ならず 歸カヘらずとも 尙ナホまだ 八代大佐ヤフシロタイサ あさまかん 第ダイ

三次ジサイ 閉塞決行ヘイソクケツカウ みなさぐちをふさ 予ヨに送オクれる 小笠原長生コサハラナガシに

おくり 書信シヨシンの 一節セツ ひさまきり 熱涙ネツルイ あつき 友情ユウジヤウのなさけ 泣ナかざ

るを得エんや ならんでを 嗚呼ア 隊員タイイン そのくみのひ 訣別ケツベツ わか

光景クワウケイ あり 壯烈フウレツの觀クワンを以モツて充ミタされしよ までみだされてを

親シタしく 帶オべる 齎ジンしはなむけ 嘗カツてある 捧サげ

て 成功セイコウ しがらを 刹那セツナ その 身體シンタイ だから 宿ヤドれる 高カウ

潔ケツの觀念クワンニ けだかくいさき 達タツせるものにあらずや さいたも

か 生還セイクワン かいきて 敵彈テキダン だすのうち 骨肉コツニク 微塵ミジンに碎クダかれしかほ

もにくも、こなみぢん 沈没チンボツ 沈没ボツ 花々ハナハナ とき 戦死センシを遂トげ ちりつばなる



濤徒ナミイに吼ホゆれども勇士イウシの消息セウシクを傳ツタへざるを以モツ

てばつかいわんのなみは、いたづらにごうくさおさをたてくほゆる  
ようにきこねてもいさましきひさのたよりをしらせてこねから 知るシるに由ヨシ

なしシるコここ忠肝義膽チウカンギタンもやはらわた堅カタく信シンじて疑ウタガはざる

所トコロかたくあてにして、北清拳匪ホクシンケンペイの亂ランに際サイし北清に義和團のそうがあつたまきに 列レツ

國クニくくの環視クワンシの中ナカみてるなか 太沽ターク先登第一セントウのいちば

名譽メイヨを博ハクせるあらはす 意氣イキるこ、猛烈モウレツはげしく 堅壘ケンレイかたき 據ヨ

りよりごこ聯合軍レンガフケンつたいくさ 亂射ランシャしむやみに 頑強グワンキヤウなる抵抗テイカウ

かたくなにつよ 遼巡シユンジュンみしりご 蹶起ケツキ一パン番ひさたびご 捷徑セウケイみちか 彈雨タンウ

を冒オカしあめさふりくる、た 砲壘ハウレイだいう 逼りセマしが。 偶々タマ々りから

指揮官シキウワンさしづす 敵彈テキダンに斃タフれてきのたま 向背相繼カウハイアヒツぎうしるま

く 一大悲境ヒキヤウかなしきばしよ 奮然フンゼンになるき 躍オドロせて。 外廓ゲワイクワクそこ

わ 闖入チンニフすまつしぐら 屈せずタツうへいこ 攀ヨちるのぼ 臺上ダイシヤウに屹立キツリツ

せしに ほうだいの上に 震懾シンセフそれるへお 散亂サンランばらりく 衣囊イノウに搜サグり

中ナカにさがす 掲カげる 遺失イシツしておこ 此コの機に乘ジヨウじてきをつ

けこ 自國ジコクわが 掲揚ケイヤウあげるけ 瞋イカらせ。 大喝ダイカツ一イツ聲セイ之コレを叱シツし

おほきなこゑをし 死屍シシの血チがいんだし 黃龍旗クワウリョウキ支那シナの 赤圓アカマルを描エガき。

○高等小學讀本字引 第五課 白石少佐を憶ふ



日章旗ニツシヤウキのひのまる 竿上カンジヤウうへの 猛勇大尉モウユウタイいさましく 轟かせりトコロ

爾來ニライのちの 不敵フテキの雄魂イウコンなにもものにもおそれ 彌々イヨク。本領ホンリヤウ

を發揮ハツキしあらはす 第一ダイ弾ダン一ばんはじ 尋ツいでいて 熱望ネツボウしつれ

而シカもそれかば 満足マンゾク。突入トツニフいつき 期キしたるこころにか 猛マウ

烈強剛レツキヤウガウの意思イシぞつよきこころぞ 其ソノの風フウそのあ 懦夫ダフも爲タガ

に奮起フンキすべくなまげものも、そのためにふ 効果カウクワしる 代表ダイあらはす

齊ヒトしくおなじ 切セツにしき 健全ケンゼンあるすこやか 歸來キライの期キるかへりきた

第六課 敵襲

敵襲テキシウいながつ 南山ナンサンまんじゆうの 些トリテてきがよりごころ 探サグらんすやう

幕僚バクレンつれてそのくみした 楊家屯ヤウカトンの名 宿ヤドりけるさまり

眞夜中マヨナカ 圓寢マロチれてそのまゝで 呼ヨびつぐ聲敵襲コエへよびつぐあれから

聞きキもあへずきくもき 集シフ合ガフ地チあつまる つどひけるあつま

衛兵エイヘイへいたいする けなげにもひいきほ 中窪道ナカクボミチまんなかのくぼを

りしきへた 蹄ヒツメの音オトをしおまのあ 青空アテソラら また、く星ホシ二つ

三つほしが二つ三つ、うからうまいせる家族ごもが 折オリしもあ

れそのさき 畦道アゼミチの中 影黒カゲクロしるくろいかげが見ゆ 止トマれ誰タぞだれか







至るこめはみがいらぬやうになる 魔まもの 諺ことわざ 情オコる者モノも。種子タネを蒔まき。

苗ナを植ウゑ。同オナじ報ホウを得ウべきにおなじやうなる 佳報カハウを蒔まき。

惡果アククワつくるいけ 情タイ怠ダを警イマシむるひさがなまける 造化ソウカの鞭ムチにや

あらんてんのかみさまのむちともいふものであらん

二、干潟の舟

干潟ヒカタうみのみづのひ 逆サカひてさかかしに 行ヤるふれをさ 間切マキるきこい

ふ工夫フクワあちらへやり、またこちらへ 押オし切キるむりにるをお 意地イヂ地チるしてすいむ

潮シホの底ソコりて。遠浅トホアサの海ウミ。舟フネを操アヤツらん道ミチなくふれを

るべきしか たがない あだににむだ 心ココロの煎イらるゝものこころがいらのカ嘗ツて

まへ 然サる折ヲリにそのやう 爲ウすべき手段シユダンですべき 老オいてさしよつて

巧者カウシヤなる舟人フナヒトよくなれてを 何時ナンドキにてもでも 纜トモヅナを解トかん

こならばこもづなをさいいて舟 繫ツナぐ。素人シロウト。繫ツナぐ時は解トく

こころを思オモはず、解トく時は繫ツナぐこころを思オモはずこころを

かんがへぬさいふ こころをいひしなり 歸カヘる能アタはずかへるこころ 徒イタヅラにむだに干潟ヒカタに焦アセる

様ヤウの事コトもあるにイタ至イるひかたにたつて、きばかり 既スデにも居イ

坐スワりたる舟フネとなりたらんにはひかたにふれが 其ソノの場バに

○高等小學讀本字引 第七課 寓言二則



臨みてそのとき 心のどかにゆつくやがておつ 足もつれ

のせぬあじさきのじや 時餘らばつかんがのこ 舟道具ふねの 丁たい

寧よく 檢ツラタ 繕ツクロ ひりつぐらう 時トキ 潮シホ を待つべしき

愚オロカ しけれご 賢カシコ きわざ。爲ナ し

果ハ つるにも至イタ らでしてしまふに 忽タチマ ちにしていご多

時トキ の足らざるを覺オホ ゆるのみうにおもふのみ 心ココロ

煎イ らるゝことなご有る べくもなしこころのいらく

思オモ ひしかばおもふた

第八課 フリードリツヒ大王と新兵

フリードリツヒ大王ドイツのむか 常々ツチ 近衛コノエ の軍隊グン

極キョク った質問きまつた 貴様キさま は何歳ナンサイ に相成アヒ なる

兵役ヘイ に就ツ いてで 給料キヤレウ も器品キヒン も

編ヘン 入ニツ れる ドイツ語ドイツの かうく

詞コトバ 順ジュン 陛下ヘイカ 檢分ケンブン 新兵シン 目メ に

留トマ ったためいた 例レイ の通りトホ 變カハ つて。吃驚キツケウ 目メ に見ミ

の儘マ 愕オドロ いて。朕チン の考カンガ へる所トコロ 痴漢チカン 眼メ を見ミ



張つてばらなをたて 部下わがて してして 譯ワケ。氣色キシヨク 尋ジン

常ジヤウならぬひさいほり 一言ゴンも解ワカらぬ趣オモムキ 手テい。

仔細シサイ無ないい 追オつ付ツけなく 手テい。

第九課 近世文章の變遷(一)

近世キン 變遷ヘン 治世チ 末路マツ 實用文ジツ

章シヤウ 文體ブン 專モツら 通俗ツウを旨ムチとし 患ウレヒ

了解レウし易イくして 意味イがら 誤解ゴがへる 患ウレヒ

ななきしんばい 禮節レイを失ウシはざる 諭告ユかみからさ

裁判サイ宣告パン 苟イも 辨知ベンす 公用コウつたこと

尺牘セキ 尊卑ソン 長幼チヤウ 存ソンしたり 斥シけあげ

嘆願タン書類グワン 異様イの文體ブン 往々ワウ 不雅フ

用語ヨウ 缺カける 繁褥ハンの弊ヘイ 野鄙ヤ 不雅フ

杓子シヤク定規テイ 雖イも 煩累ハンらわづ 野鄙ヤ 不雅フ

免マヌがれざりし 雖イも 慶長ケイ 元和ゲン

寛永クワン 寛文クワン 元祿ゲン 正徳シヤウ 享保キョウ 復雜フク 緻チ

密ミツ 現アラし 恰アも 覺オぬしむ 僕ボクの文ワを書カいた

高等小學讀本字引 第九課 近世文章の變遷 二五



ひさの **常に敬服**し いつもへいこうして **措**かざる かすてお **大家** よくでき

**漢文** しなの **拘らず**。 **國文** 日本の **著述** あらはし **仁齋** 藤伊 **東**

**涯** 藤伊 **白石** 新井 **鳩巢** 室 **徂徠** 荻生 **春臺** 太宰 **高妙** たけだかくて **草** ソウ **せ**

**られ** つくら **降りて** よのなかが、のちになつて **和蘭人**。 **風説書** うわさをかいた

**和解** 日本のこと **唱** 名をつ **へ** ける **翻譯** よそのことばを、わが **原文** もとの

**近松** 門左衛門 **竹田** 出雲といふ、この二人は淨瑠璃などよくかいたひと **就** でき **り** た **淨瑠璃**。

**其** **積**。 **西鶴**。 **小説**。 **戲作** たはむれにつ **言** ふ **可** から **ら** **ざ**

**る** **妙味** に **富める** にあらず **や** いふにいはれぬおもしるさ **畢竟** ヒツケウ

**美果** よいで **漢** め **き** きて **支那** 支那風に **漢文** 直譯 支那の文をそのまゝ

**蓋** し **ふ** **樂翁** 公 **松平** **越中** **守** 白河の城主 **賢宰相** かしこき

**學問** **を** **獎勵** せ **られ** す **め** **は** **諸侍**。 **輩** やか **靡然** な **く** **さ** **の** **風** に

**風** **に** **化** し そのふうにし **延** いて **ひ** **ろ** **が** **所** 謂 よにいふ **盛運**

**西陲** す **み** **頻** りに **い** **つ** **東隅** の **す** **み** **蝦夷** **地** **騷** **擾** の

**變** を **戒** 心 **ん** **す** **る** **憂** 慮 **い** **す** **る** **策** は **か** **り** **旗** **下** **も** **た** **浪**

**人** **の** **輩**。 **海防** **を** **策** し **ん** **を** **い** **ひ** **た** **て** **る** **開** **拓** **を** **議** し **ら** **く** **こ** **こ**

**上** **る** **も** **の** **前** **後** **陸** **續** **た** **り** あ **さ** **さ** **き** **つ** **い** **た** **建** **議** わ **か** **ん** **が** **お** **も** **ふ**



まをし 上策 ばかりごころを 尋常 ほり 拘束 からみつ いでや 一番

顯 みせ 當路 御感に與らばや 情勢 そのすちのやくにんたちに 堂々 さか 建白 古

今 例證を援き 體 おかみへまをしあげ 備 を成す 漢様 支那の 自 ら別

に 一體を成す 崩 れ初め 洋文 直譯

よりのふんをその 與 つて力あり 諸君 みな 禮節 の用語 御 様 洋語 は更なり

よりのふんをその 與 つて力あり 諸君 みな 禮節 の用語 御 様 洋語 は更なり

第十課 近世文章の變遷 (二)

諸君 みな 禮節 の用語 御 様 洋語 は更なり

よりのことばも 比較 くら 尊卑貴賤 たつきさひくさき 分別 わか 附

着 く 嚴重 おごそ 往時 むか 博士 もの 經史 けいし 諸子 老子

子 など 譯讀 ほんやく 死生存亡 せいぞん 聖主 せいしゅ 所欲 しよく 急聞 きゅうもん 也 しぬるこ

信 不知 有 陛下也 當 是時 臣 唯獨 知 有韓

のいらせらるゝさい 記憶 するに便ならず 漸 々

輟 め 以 降 現 に 棒讀 風 廢 り

名 殘 痕跡 あこ 受理 せられず 挿入 して



餽羊キヨウを存ゾンしのあさかた 尊攘ソンジヨウの有志家イウシカらきみをたつさびねびすをば際サイ

しりあた 廢棄ハイキやめす 歐文翻譯アウブンホクヤク日本せいようのぶんを 弘化クワカクワ 嘉永カエイ 前のころ 純然ジュンゼンのまじり 米使ベイシのつかい 國書コクシヨを捧サげ國へおくる手紙をも

つ 安危アンキに關係クワンケイにのやすきとあや 校閱カウエツしらべき 累カサれ 更アラタめ

ずぬかへ 若シかず 拮据キツクツとしてごつて 親シヤしくんに 難文ナンブン

りいふん 閱歷エツレキしたるほつてきた 儲サテ 混用コンヨウもちふ 勝マサりてい

りいふん 明瞭メイレウきりある 歟カ 概ガイしてざつ 幾等イクトウを讓ユツりた

りいふん 筆フデを下クダし 抑揚ヨクヤウあげたり 波瀾ハランになみのたつこ

くこ 達意タツイさら 更アラタめて 拙ツタナかりしは 幼穉エウチの

時トキのこ 咎トガむべき 泰西タイセイようう 争アラソひてき 勃然ボツゼンとし

てむつくり 悲カナしいかな 陷オチつたり 精微セイビ

なるこまか 説トき露し 結構ケツカウくみ 活用クワツヨウせん 斐然ヒゼンと章を

ひ 一般パンの望ノゾミなりしひ 平素ヘイソく 斐然ヒゼンと章を

成ナすすらく 作家サクカ諸輩シヨハイらぶん 漢語カンゴまれ支那

あれ 批評ヒツピョウへう 忽タチマちに 著書シヨシヨあら 官省クワンシヨ 法ハフ

延テイんさい 公文コウブンきの 移ウツりか 創始サウシ諸賢シヨケンみな 慣ナれ 巧タク

○高等小學讀本字引 第十課 近世文章の變遷 三一



みにすに **骨子**ほねこ **和漢**わくわん **雅俗混同**みやびたるまじりたること

**優美**ゆうびの姿すがたを存ぞんし **狀**じやうにて **玄妙**げんめうの境けい

に達たつし **竊**ヒソカに **惜**オシいかな **或**アルヒ

は **歸**かへらぬ **冥土**メイドの **旅**タビに **赴**オモムき **老衰**ラウスイして

**文壇**ブンダンを去さり **事故**ジコの **爲**タメに **魯靈光**ロレイクワウ

**僅々**キンク **數人**スウニン **踵**クビスを接セツして **現**アラハれで **英**エイ

**才博識**サイハクシキ **勝**マサる。 **俊秀輩**シュンシウハイシユツ出デせられ **不審**フシン

更サラに **煥發**クワンパツすべし **然**シカらざるは **不審**フシン

いぶかし  
うおもふ

第十一課

智慧は小出しにすべし

**智慧**チエは小出コダしにすべし **金言**キンゲン

おしへの **現**アラハし。 **颯々**サクサク **鼠捕**ネズミトる **猫爪**ネコツメ隠カクす。 **生涯**シヤウカイ

で **等**ヒトし **後進生**コウシンセイ **動**ユルもすれば **氣取**キド

り **頓着**トンチャクせず **愚鈍**ドクもの **迂濶**ウワツを **評**ヒヤウせらる

うつかりしたもの **馬耳東風**バジトウフウ **高**タカく **自**ミツカら **搆**カマへ **拙**セツ

者シヤの本領ホンレウに **非**アラず **柄**ガラに **相**サウ應オウせず



數寄嫌ス キキラヒするものこの 貴公子キ コウシ 選エラぶけりわ 情ジヤウに異コト

ならずチガハス 藏オサめてもつて 了簡レウケンならんかんがへ 觸フれた

る例レイを聞キかずれすみから 音ネに 蜻蛉トシ 蟬セミ

伎倆ギリヤウを現アラハすうでまい 捕物トリモノの大小オホコトに論ロンなくさるものい、大さ

試コ、ロむる機會キクワイあらんにはあつたならば 空ムナしうせずせむだに

功名コウミヤウを評ヒヤウしてなを 可カなりよる 豊ホウ太閤タイカフ 草履ザウリ

取トリ 炭薪スミタキ奉行ギヤウ 普請フシン奉行ギヤウ 甲斐ヒ々々く 平ヘイ天下テンカ

辨ベンじわきま 暫シバシバくしてすこしの 掌シヨウ握アク 平ヘイ天下テンカ

當時タウジの 力リキみたらばちからをい 畢生ヒツセイの大業タイガフ

第十一課 佐夜サヨの中山ナカヤマ

江戸エド靈岸レイガン島シマ 諸崎モロサキ庄シヤウ右衛門エモン 予ヨ 縁エンにしてしん

豪富ガウフ 歸カヘるさもどり 遠州エンシウ 休ヤスらひきゆうそ 飴アメの餅モチ

兒等コラ 羨ウラヤましうらやま 與アタふやる 床シヨウ几ギに凭ヨりてツバヤ 吐ツバ

く様ヤウ 貫モラひし 物モノ越ゴしの耳ミミ

に止トマりはなれた 童ワラハの様子ヤウスを窺ウカふそのこごものや

負オひたる 介抱カイハウしつるしこせわしてやる 懇キンなるそのしよさ



尋常ツナならねばなみくでイトケナ 幼き兒コ。 山蔭ヤマカゲなるやまの

農夫ノウフ 不作フサク 生業ナリハヒし難ガタければくかつたればか親オヤの

質シツを繼ツぎておやの性直セイチヨクにしてうまれつまがが正ユガめ

嫌キラひがいや 調度テウドのしたく 己オノレが食シヨクにあらざればくぶんが

悪アクを云イはねばひさのわるい 憐アヘレみ養ヤシナひ侍ハベりぬふびんにおも

頻シキりに欲ホしほむやみにねぎつればねがひま 主シウ従クの契ケイ

約ヤクのしゆじんさけらい 得エしてたい まめくしくにたらく 私ワタクシだ

無ナしかつてなこ 非ヒを舉アげていちんをする 屢シバ々

忠言チュウゴン耳ミに逆サカふよいこさばい 果ハてはりは 不興フキョウを受ウけ

奢オゴる習ナラヒが程ホドあわづかの しのびけりあました 財集サイアツマれば

奢オゴる習ナラヒが程ホドあわづかの しのびけりあました 財集サイアツマれば

泉石センセキ 万鎰マンイッ 庭園テイエンの作ツクり

蹴鞠シュキウに耽フケりあそびには 産サンを傾カタムくしんだい 借シヤク

助タスケを失ウシナひせわするひさ 分散フンサンにしる 逆井サカ 潜ヒツみ

隠カクれ 調度テウドのだうぐ 煙ケブリの代シロとしてそのひのくらし 勞ツカれしんば

明暮アケクレ 壊ヤブるこわ やがてなく疫エキに冒オカされはやりやま 治チサめ



んすべもなくれうちするこ訪トふるおこづ導引ダウイン病篤ヤイヒアツしうきや

があシ強シひてむり看病タンビヤウ資シこしもさ枕床チンシヨウを涼しく

しまくらやまを炎熱エンチツを退シリツげあつさを藜麥レイバクの鹿糧ソウラウを嘗チめ

あかざやむぎのそまよりく羹アツモノるし常に違タガはずなりぬ

へいせいさかばら浪華ナニハ家イヘを興オコすだんなのいへをもこの暇イトマ君キミ

あなコ小商アキナヒ感涙カンルイを止トめかねかだをさめられぬ路費ロヒのだうちゆう

旅行リヨカウ財サイは妨サマタゲなりかねはじや導引ダウイン資シなれもさで

序ツヒテ故郷コキヤウ子育コソダテ觀音カンオン盟チカへりやくそ堂島ドウジマ徘徊ハイクワイ

ぶらサン算筆ソウヒツ暗クラからす事コトの由ヨシ詳ツマビラかくわ

忠節チュウセツ取トりてけりあらはさん印シムシ

富トみ榮サカゆるそ柳澤淇園ヤナキザハキエン雲萍雜ウンペウザツ

誌シ

第十三課 野蠻人ノ智慧

野蠻ヤバン南部ナンブ種族シュゾク駝鳥ダテウ捕トル工夫クフウ

餘程ヨホド食料シヨクレウ羽根ハチ裝飾品ソウシヨクヒン鋭クテスルド

怪アヤシイふし手段シユダン目的モクヲ達タクスめあてを斯カウカ豫カ子シ



テからへ **旨ク** ばいあん **脊**。被レル様ニ拵へ。歩ク。一

寸。偽物にせ **脚**。自然ノ儘ノ **點**テ見顯サレル。あ

のくろいのでみ **虞**。塗リ。騙サレ。眞實。餌拾フ。

群れ **一疋**。竊ニそつ **覘**テ定メ。放ツ。逃ゲル。

射方ガ巧デ **暴**レ廻リ。似寄ツタ趣向

同類 **誤認**。狼。群居。害セズ。頭付キ。

好ク馴レ。眞似。一向平氣。類シテ

覆ヒ **四ツ** 這 **番**ヘテ。心臓。類シテ

險 **併**シ **比較**的 **這**入ツテ。非常ナ困

難 **カン**ジキ **之**ヲ穿イテ。雛形

リ **指**先。孔ガ設ケテ。緩ニシタリ。隨意

調子。身輕デ。敵ハナイ。仕止メラレテ仕

舞フ

第十四課

源平時代の武士

源氏 **平**氏 **公**の固め。奉仕して **多**田 **滿**

仲 **賴**光 **賴**信 **賴**義 **義**家 **主**將 **武**



勇絶倫ユウゼツリン ひつきなみすぐれてあるが 騎射キシヤ うまにのりて 長チヤウ じすぐれて 事コト あ

ればレバ いくさが 大功ダイコウ を 樹ツ て おほきなてが 郎黨ラウトウ そのな 有ユウ しもつて

攝政兼家セツシヤウカチイヘ ふちはらのかれいへは、で 富有フイウ もち 前九年後二年ゼンケンゴ つむ

のい 奥州オウシウ むつ 練磨レンマ がくりみ 奨勵シヨウレイ すいめは 剛臆ガウオク の座ザ を分ワ ち

しよしいへが、そのけらいの、つよいものさ、おく 一端タン を見るべしシ その

れがみら 鎌倉權五郎景正カマクラゴンラウカゲマサ 満マン たずナラズ 拔群ハツケン の働ハタラ き

たはたすぐれ 右眼ウガン のめ 射殺シヤク し 仰臥キヤウグワ しニ あをむけ 爲次タメツゲ 怒イカ

りレ はらハ を 弓箭キウゼン や 武士ブシ の本望ホンモウ ののぞみである 踏フ まる 恥チ

辱ジヨク ちチ は 詰責キツセキ なじり 剛情ガウジヤウ のつよ 尙タツト びし 堅甲ケンカフ よろひ 三領サンレイウ

針ハリ 疊タ み 樹上ジュジヤウ に懸カ けニ 射貫シヤク きニ 季武スエタケ 懸カケ

怪鳥ケテウ を射シ たる 那須與市ナヌヨイチ 扇アフギ の的マ 的テキ 忠盛タモリ 家イヘ

牲セイ に供キヤウ しニ 私鬪シタウ のたふんがひつて 叛ツム くるもの 渡邊ワタナベ 競キソウ

貞サダ 辱ハツカ しめ 附從フジユウ し たがふ 護衛ゴエイ する 假カリ にもカ

谷部セベ 信連シノヅラ 無雙ムソウ の譽ホマ れニ 弓箭ユミヤ 假カリ にもカ

遁ノガ れ 目覺メザマ しメ 斬キ り伏フ せキ るす 赤手セキシユ 六波ロクハ

○高等小學讀本字引 第十四課 源平時代の武士 四三



羅ハラ京都にセキ責問せられア遇ふ。毫ガウもツつゆいさモ摸範ハシはて  
シヤウ稱讚せられホほめたいユ所以エけわハシ反してウうらははヒ卑怯キヤウうみれん  
シリツの斥け。重衡シゲヒラ。後藤兵衛盛長ゴトウベウエモリナガ。自らの馬ミツカを求めら  
 れんオウことを恐れジぶんのうまをだせさいカウヤ高野クニのアザケ嘲りてク  
スあな悪くやサくてフ不便にし給ひつるナんぎをしてゴざる主人  
ニ尼公コウあまトモ供して。爪弾ツマハジキしヒひのなかまキヨ怯懦オクビ壇浦ダンノウラが  
クニ死すべかりけるシをシなればならぬイ生け捕られゴ護  
ツウ送せられてテおくられるテ諂テシしツつらふアイ愛憐レみコ乞ひシむたのシ出

カ家シばうすシ將軍武勇の家イへハのフ振舞マヒさク決してキつ  
タ他人の屈辱を受けクつウはヨそのひさのセツ切腹ハはらハ果つるシねジヤウ常  
ハツ法キりサ貞盛モリ。維衡ヨレヒラ。維茂コレシゲ。正盛マサモリ。忠盛タケモリ。輩出ハイシユツいて  
ニでニ遽ハカにテ朝貴チウキに列すテうてイのたつタつきカ嘗てカあるウ羨みシ。  
マ真似チ。管絃クワンゲンふわやモテ弄アツびて。優柔不イウジユウフ断ダンやサしくニゆるウじヤくニ  
ウチ裡ナホ。尚ナホもテ湮齒粉面エンシフンメンはハをソめたりカほニおボウ亡滅マツをマ招きシしルほ  
アびるシもシをマ怪むシにタ足らざるニなりニあタらぬコ事コ

第十五課 鎌倉の海



明暮あけてもくれても波なみの聲こゑ。宿やどりこするわがやどに居ゐながらに  
 してすわつて望のぞむべくながめ靈山崎レイザンザキ。浮ウカべるみういて聳ビ  
 ゆるありたかくたつの由井ユヰ。鯨クジラの潮吹シホフく。隣トナリ。飯島イヒジマ  
 ごとく起オきはやく渚ナギサみづ薄紅ウスベニ。眞白マツシロ。帆立貝ホタテガイめき  
 たるほたてがひの濡ヌれたる。すまふそふ磯イソ。翻ヒラるひらひ  
 告ツげせら風ナぎたる。潮浴シホアびんこて勇イサむしほみづをあびた  
 朝アサけの煙ケブリたぐけむり許モトる。白布ハクフの筒袖ツツソデついでの麥藁ムギワラ  
 の帽子ボウシ。物モノの具グはよし。戰疲タカヒツカれつかれるこゝ砂スナに臥フ

しすなのうへにねる坐ザすすわ築ツげばつきあ大舉ダイキョしおほいにいいきほ一打イチダ  
 に奪ウバひ去サるひさうちにこ板イタを浮ウカべ。双ソウの手テりやうほ游オヨが  
 ん。舞踏マタウしつおごり境界キヤウカイにやあらありさま欲ヨクな  
 く。憂ウレヒなししんばいこごぞりてのこら炊カシぎめし煮ニる。  
 提ヒツサげカヘ歸カヘりさげもごる庖刀ハウテウ。俎板アナイタ。鱗ウロコ。逆サカさま。鰭ヒレ。社シヤク會クワイ  
 の一進歩シンシンポなるをよのながの一つ片帆カタホ。影カゲををさめみかげが  
 なるやうに染ソめ。忽タチマち紅クレナにはかに薄ウスく。天女テンニヨの額ヒタかあま  
 ひさめのひたい造化ソウカの影カゲかてんのかみさ抑々ツモはまた美ビの神カミの弄モアソびけ



ん筆ツテかうつくしきかみのもてあ ひまよりあひだ 黄金コガネのサカヅキ盃つぎ  
 銀ギンを散チらし。 鏝チリめゆほつてく歩アムけば。 あざやかに  
はつき興キヤウに乗ジヨウじておもしるさに吟ギンずうた 朝霧アサギリ。 従シタガひ來キタり  
ぬついで父チの肩カタを興コシにしてかたくまに 遅オクれきわれさ 摘ツみ。  
 蚊屋釣草カヤツリグサ。 手テに餘アマりぬてにべい岸キシのひたひきしの姫ヒメ  
 百合ユリ。 玉蜀黍タウモロコシ。 緑キナンドリの弓ユイを掛カけ。 十六大角豆サササゲ。 穂ホ  
 に出イでたる粟アハ頭打垂カシラウチれかんで 送り迎ムカへす。  
 叔母チヤ。 おはすおいで 待マちつるまつて 盛サカリ。 蓮ハス。 銀杏ギンギョウ。

あるじぶりしてわがあるじのや おはせおいで 小坪コツボ。 逗子シ。  
 見下ミオロし。 たぐふべきものによつた 筵ムシロの如ゴカき。 蟻アリの  
 如ゴトくたくさんに 潮浴シホユアむ人しほをあ 葉山ハヤマ。 森戸明神モリトミヤウジン。 貝カヒ  
 あさりあつまるゆくかひをさ 叫サケびおほきなこ 辨當ベンタウ。 結ムスびつけ腰コシ  
 にありべんたうをこし 岩陰イハカゲ。 相對アヒタイすむかひあ 茶店チヤミセ。 田舎イナカ  
 娘ムスメ。 醉貝スガヒ。 菜島ナジマ。 夕食終ユウシユクオハるがすむ 日ヒぐらしせみの  
 苔コケむす石佛イシボトケ いしばさけにこけ 落葉オチバ。 さばいへさうは 誦ジュ  
 經キヤウの聲コエ おきやうを 喇叭ラツバ。 響ヒビく。 相撲取スブラウトる。 擊劍ゲキケンつかふ



鐘樓のあたりを充しぬつけんじゆつをすりシヨウロウにミタ一カばいカになるハマス 濱涼し。

佛前の燈フツゼンひトモシビこり寺テラを守マモるホさけホのマへホにソなヘたアかりガが

第十六課 問答の歌

梅は酸ウメくス。柿カキ。甘アマくコ。梢コズエのウへウ辛カラきコ。答コタへコてコいは

くテへンぶテいフいカにセむヒ他ヒトのウ上ウひゴうシたモのソ拙ツタナきモのヘたナ

二フタつアのア味アジ兼カぬベきセ世ヨのタまマふアらセ任マカ

せマおモきタ。守マモりタ頼タノまン。

第十七課 熱情を抑制すべし

熱情チツジヤウあツくナりヨク抑セイ制セイつケるカン感情カンジヤウにセイ制セイせラれヤ易ヤきモのオ

ふタこイるニひキつケらレやスいモのデあル深シン厚コウなル興キヤウ味ミおモくアつキ魂タマシヒマヨ迷ヒ心ココロウ奪ウは

れキもコいルそレにセいサツ省カ察ヘりミかコ顧コリ慮ヨおモふハ隙ヒマをイ容イれズの

がスきマがナいテウジユウシウシウチヤク聽キ從ユ執シ着クひキいシたガ自ジ他タひワれヤ抛ハウ擲チキしウつハ辨ハン別ベツまヘ

わケはゼ非ヒ利リ害ガイたメあシや存すルあ激烈ゲキしキげ制止セイる習

慣クワンをジ馴ジュン致チなラはシを罪過ザイつツみ呻吟シンさウなリ運ウン用ヨウはタらカ利リ用ヨウ

よクもチ著イチしシきタめに忿フン怒ドたラ怒ド氣キ胸ムネに満つハらタつコいルが

る往々ウウくナり狂者キヤウがキち死もシなホ避サげザるシぬルも遺し。



終身シユウシンが悔恨クワイコンうらむ 恬然テンゼンとして顧みざるカヘリ しらぬかほして、なんともおもはぬ

正義セイギすぢみち 猥りにミダみに 恥ハヂを忍びてシノこらへても 屈從クツジユウへいこ

節セツを失ウシナへば 親戚シンセキるいん 故舊コキウふるき 恕ジヨする違イトマな

く 恩誼オンキを破ヤブり 快クワイを買カふ 幼稚エウチ

忍耐ニンタイづよい 把持ハチヂして 省察セイサツかんがへり 庶幾コヒチガハくば

過アマチなきを得エん 讒謗ザンバウひそくる 罵詈バリの

暴行バウカウてあらき 親和シンワやはらぐ 要具エウグのかんじん睦ムツまじきを得エず

反目ハンモクする外ホカなかるべし 傲慢ガウマンがふる 嫉シツ

べきおもひやつて 美德ビトクきこく 戒イマシむようじんせ 傲慢ガウマンがふる 嫉シツ

妬トそれたみ 優秀イウシウを挾ハサみ 他タを凌シノぎ 卑イヤ

しめ。羨望センボウする 極キョクその 威重チヨウおもしろく 眞價シンカのれう

外ホカに表アラハれでる 模倣モハウならふ 擬似ギジひにる 瞞着マンチャクかす 侮蔑ブベツ

毫ガウもしよ 品格ヒンカクくしき 所以エエけわ 嫉忌シツキいたみ 無知ムチ

蒙昧モウマイくらいに 舉動キョウドウなるのみならず 卑ヒ

劣レツおこつた

劣レツおこつた

劣レツおこつた

第十八課 眞シンの勇者ユウシャ



眞シンの勇者ユウシヤ まことこのいきま 振り返フつて まへのことを おもひみる 當時タウジ その 善ヨ

い。悪ワルい。嬉ウレしい。悲カナしい。雜サツ多タい。ありアりくクこ

浮ウかんで來クる ういて 非常ヒな面目メンボクを施ホドした はつた

特トクにべつだ 戴イタく。價カ値チがある ねうち 或アル日ヒ。

途ト中チュウ みちす 一匹ヒキ 牝牛メウシ。追オつて。出會デつた。飼カひ。

連ツレの。あの様サマを あのや お伴トモをして。嘲アザケる わるくち 靴クツ

流リウ行カウ はや 輕カルく てが 帽バウを取トつて ばうしを 牧場マキバ うしをか 缺ケ席セキ

鈴リンの鳴ナる前マヘ かくかうのおじ 授業ジュエを受けウケなら 終オハる むす

率ヒいて びつ 以イ後ゴ その 續ツけた。理リ由ユウ けわ 一タイ體テイ すべ 扱アツふ。

餘程ヨド。卑イヤしい たげ 罵バ言リ の 嘲弄テウロウ あざけり 屢シバ々タビ 繰返クリカヘ

され おなじこと 寝チる。匂ニホがする。聞キくに堪タへぬ きか

牛乳屋ギウニフヤ うしのち 罐クワンを洗アラふ時トキ。餘計ヨケイ さん 笑聲セウセイ わらひ

るびれずに ほも 僕ボク わた 質シツの良ヨい のを よい の 量ハカリを善ヨ

くして上アげる。舉アげられた そつげふし 關クワン係ケイ者シヤ かい はり の

悉コトく の 列席レツセキ その 授與ジュユ さつげあ 優等生イウトウセイ すぐれてよく 斯カう

話ハナした。茲ココに。賞品シヨウヒン ほうび 非常ヒ ならぬ の 眞シンの勇者ユウシヤ まこと



いさまじきもの **創立** 以來 はじまつてか **今井猛君**。少女の將に溺

れようとして居る こむすめがみづにはまつて 風を揚げて

る **貧しい少年** わかもの 通りかゝる。遽に騒ぎ立て

ましたから。驚いて びつくりする 脊中。放り出し。一散

らに **駈け出し**。起きも得ない **大怪我** おきることもならぬ

少々 **隔て** すこしは 荒れに荒れ あはれる 擴げて。抑へ。

抱き起し おこす 丁寧 ていねい 介抱して遣り せわし 近所

ちかひこ **寡婦** やもめをん 曳き。扶け たす 荒屋 あははて 老婆

どしよりの **跛** びつ 牝牛の乳を搾つて。僅にやつ **過** すこ

す **追ひ遣** や たり。牽いて歸つたり。子息。大怪

我 おほきな **悲嘆** かなしみ はごんなでしたでせう そのをんなのかなしみ

たのであ **見る** みる に **忍び** しの ないで か みるに **お婆** おば さん **心配** しんぱい なさ

るな。子息さん。癒 なほ る **間** ま **扱** あ けて **扱** あ けて **扱** あ けて

をまきばへやつたり、まきば **親切** しんせつ **音** ね に。少年 せうねん の **療** りょう

治代 ちだい **困** こま る **懐** ふとこ から **巾着** きんちやく を **取出** と

し **靴** くつ。穿ける は ける **差當** さあ り **貫** ぬ ぬ



戴イタいては濟スみませんなりまつてば 茲ココに。豫カねてかれ 遣ヤツ

た。固モトよりもち お召メしになられるるおほきな お志ニ、ロギシに

甘アマへてごしんせつなおこ、喜ヨロコんで。追オひ。牽ヒき。嘲テウ弄ロウけり

から 言語ゲンゴ 絶ゼツしてほごであつた 殊コトにてわけ穿ハいて。物笑モノワラヒ

の種タチ わらひばな 毫ガウも意イに介カイしませんすこしもこゝろに 扱アツか

ふ。辯解ベンカイ わけ 幸サイハヒによいに 事實ジジツ わけ 受ウけるに 足タる者者モノけ

るだけのしかくが、聲コエを更アラタめて。大村正雄オホムラマサヲ 席セキを離ハナれて

わがをるまに、徐オホムロにしづし 教壇ケウダンの方ハウへ進スむけうしつのだんのある 拍ハク

手シユ てをうつ 忽タチマちには 急霰キフサンの如ゴトく起オコつたにわかにふるあられ 席セキ

に歸カヘらうととするもこのをりばに いきなりかに 走ハシり寄ヨる

よる 來賓ランヒン おきてをる 視線シセン みてをるめ 等ヒトしくおなじ 集アツマるひさつ 手テ

を執トつててをさらへる 泣ナいてなきく 過クワ去コの罪ツミ たつきさつ 詫ワビるあや

起オコる度タビにおこすた ゴくとくする程ホド みかふる 愉ユク快クワイ こころ

第十九課 岩倉公の逸事(一)

逸事イツジ よにかくれ 旋メグりく 流ナガる、 水ミヅよりも 早ハヤく月日のたつ

故右府公コウフフウキョウ 岩倉公(具視) 世ヨを去サりたまひしさしにな 大詔タイセウ



てんじさまの **富士**がれの**安**きに**置**でやはと**わ**が日本のくにを

きほごにやすくをさめね **一筋**の**誠心**ひさすちのま **満**ちわたり **今更**

る **窮**みなき **語り** **繼**ぎ **聞**き **繼**ぐ **今更**

に **世**の**鑑** **維新**の**初** **史**人の**料**

す **な**し **な**ん **維新**の**初** **史**人の**料**

こい **へ**る **大義** **輔翼**の**力** **碩**學

や **野**々 **口** **隆**正 **建武**中興 **振**は **ず** **當**

時 **の** **縉**紳 **源**親房卿 **學**識 **御**覺 **も**め **で**

たかりしてんじさまがお **所見**みる **延喜**天曆 **風**

の **公家**武家 **隙**を生ぜしなれ **公武**の**別**

に **大勢**を**達觀**してんかのありさま **原動力**

**看破** **百揆** **庶政** **思**ふらめ **塾**居

**盤根錯節** **破竹**の**勢** **思**ふらめ **塾**居

**溯**りて **宿弊** **譴**を蒙り **塾**居

**召**により **参内** **大囊**を携へ

**計畫** **玉松操** **起**草 **復古**經綸



しにかへりせ **策案** はかりごと **物論紛々** よのなかのぎろ **躬を以て**

責に當り そのやくめ **從容** おつち **應答** たへ **雄藩** つよいだ **攝**

**關** せつしやう **議奏** **傳奏** のやく **親政** つりごさをあそばす **洪圖** ひな

旬日の間 のわづか **基礎** **禁閫** のうち **達文** のふみ **掲**

女房の請謁を納る をんながたのおめだうりする **痛く禁**

止 きびしく **將來** のち **遺し** **晩年** のちの **扇の要** たいせつ **偉**

丈夫 おそぐれた **聲色** を近づけず をんなやなりも **酒肉** を嗜ま

ず さげやにく **夙** にはやく **抱きぬ** こころにも **偶々** ふとした **貸し**

與へ。起居を俱にし おきいをひ **薨去** おかくれ **一夕** ひさ **こ**

とさら べつだ **履歴** した **功績** ほし **語繼** の料 ひのたねに **慇懃**

侍りし おそば **譲り** **斷然** きつば **開國** の國 **是** をくに

らいて、せいようさかうさい **姦雄** に誤られ だまされた **許** を辭し ばそ

ごひして **應** へだにせず もせぬ **一室** **屏風** **立て籠め**。

**賞** を頒つ しやうび **歎** かけし である **裏の隱戸** **鎖國** の

非 くになさ **悟** らせられ きが **口惜** しく。 **理** なり

き もつとも **翼賛** ける **大御史** **己** の **勞** を露 ほごとも のほねん



をりすこし ホコリガホ 誇顔に がほに 史人 れきしな 中止 さちゆうで となり  
 し、 あくなつた 事々しく げうさん あかず あき  
 す 秘めたまひて かくしな 藏めて かくし 後の人の鑑 かみ のひ  
このて ほん

第二十課 岩倉公の逸事(二)

剛膽 きものつ 第一要徳 だいいばんのか 長袖 ながそで 〇 覺 おぼ のぬ  
 ばかり おもはれ 剛毅 つよ 征韓 せいかん の議 ぎ ばつ のぎろん 蕭墙 せうじやう の内  
てうてい 變亂 へんらん 邸 てい に参り。 謁見 えつけん し かめる 一應 おウ 二應 おウ  
のうち

怒れる眼血 まなこち をそゝぎ はらたちのめにはち 毛髮倒 もうはつさかしま に豎  
 ち かみのけもさ 脇差 わきざし 鞞 さや 撓む たユ 握り ニギ 貴殿 きでん 意見 いけん  
 を枉 ま げ をまげ 障子 しやウジ の隙 すき より窺 ウカ ひつゝ ふすまのかげ 手に  
 汗 アセ を握 ニギ り ごうなることかさ 動 ドウ ずる色 いろ なく さわぐかほ 自若 じじやく  
て 座 ザ を守 マモ り ごかぬ かしこき おてん あたり おさま 君臣 くんしん 水魚 スイギョ  
きみさけらいさか 雲 クモ の上 ウヘ の事 こと ち ごしよのう 畏 カシコ け おそれ れば おそれ 洩 モラ  
みづさうをのやうな 大久保 オホクボ 故内務卿 コナイムケウ 心交 シンカウ のま こころ じ お 深 フカ く お  
 は かきのこ しぬ おほ 密 ヒツ 々 く 往復 ワウフク 頻 シキ り たび 心 ココロ も こ



なしでしんばい 夜ヨなくんくまはい侍サムラヒを遣ツカはし。守衛シユエイをせんを

契チギりたまふやくそく 日ヒならざるたひがた 遭難ソウナンをわるものにに創テウ

業撥亂ガフハツランらんをはじめ 内治ナイチを整理セイリしうちのせいちをへるへる 計畫ケイクワクをもくろみを

料ハカらずもおもひが 唱トナへいひふふ 晩年バンチンのちの 奏上ソウジヤウをてんしへま祖ソ

宗ソウんぞぞ 遺訓ヰクンのこされたた 勤儉キンケンんつめめけけ 輔弼ホヒツすきみをたた 臺鼎タイテイのくららぬ

公達キョウダツを戒めいましめらるる 家範カハンいへのの 守文モリブミのまいせつつ 一ヒト篇ペンききり

奢侈シヤシりおご 遊惰ユウダあそびな ままししくくつつ 侍サブラ人ヒトおおそそ

筆執フデトらせかくく 案文アンモンたたががきき 調印テウインおおすす 今イマははのの 際キハひひききを

遺言ユイゴンのこささるる 墓石ボセキいいははかか 寸法スンパフにに準ナラへよ。碎クダきき。寸スン

時ジしばしば 忙イッガししかりかりききここななんんいいそそががししかかつつたたここ 病ヤマヒにに侵オカされれや

ああららざざららんん後ノチだだののちちんん 節フシ々々ををががらら 藻鹽草モシホグサ。進退シンタイ

節操セツサウをを全マツタくくせせざるる 藻鹽草モシホグサ。進退シンタイ

標準ヘウジュンししるる 辭表ジヘウを捧サげげんん 同僚ドウレウおおなな

支サへ止トめめつつててささめめるる 是非ゼヒににででもも 歎ナガきき請コひひむむりりにに 忝カタダチナくく

酌クませかるる 重オモきき衾フスマみみままひひののおおももきき 涙ナミダにに咽ムセびびむむせせ

召メし集ツドへめししよよ 杯サカヅキままるるれれななだだせせ 歡ヨロコビのの色イロかかほほいいるる 夢幻ムゲン



の間にも のゆめまほろじ なからん後の事のちのこさ のちのこさ 雲の上 クモ

本末の序 ホンマツ ツイテ 地下の靈 チカ 百載の後に サイ

慰めよかし ナグサ (井上毅著「梧 井ノウヘコウシチヨ

陰存稿)

第廿一課

東郷聯合艦隊司令長官 海戰經過奉告

客歲 カクサイ 大命ヲ奉ジテ タイメイ ホウ 出征 シユツセイ 以來 イライ

有半 イウハン 交戰 カウセン 皇軍 クワウケン 獲ザル エ 復タビ フタ

和平ノ秋ニ遇ヒ ワヘイ トキ 臣等 シンラ 犬馬ノ勞 ケンバ ノラウ

了 チヤ 然ラシムル シカ 終始 シウシ 感激 カンゲキ 措ク能 チヤ

ハザル サツ 作戦 サクセン 陸戦ノ方向 リクセン ノカウ 考 カウ

主力 シユリヨク 方面 ハウメン 拘束 カウソク 浦鹽 ウラジホ 要地 エウチ

據ラシメ ヨ 戦略ノ主旨 センリヤク ノシユシ 浦鹽 ウラジホ 要地 エウチ

數次 スウジ 攻撃 コウシカ 漸次 ゼンジ 減殺 ゲンサツ 迅撃 ジュンゲキ

閉塞 ヘイツク 沈置 チンチ 出動範圍 シユツドウハン 縮 シユク



少 ちひめすく なくする 麾下 わがさしづ の 駐 ト メテ。 要害 エウ チ扼 ヤク シ わうがいの

監視 カンシ ス みはり 地利 チリ ニ據 ヨ リ さちのよいところ に 退嬰 タイ シ しりぞき

連續 レンゾク ツ つゞ 成果 セイコク チ收 オサ ム よいけつ 主力 シユリヨク 逃 ノガ レン にげ

蔚山沖 ウルサンオキ 期 キ セズ はから 戰略的 センリヤクテキ 企圖 キト 摧破 サイハ シ くだき

過半 クワハン 達成 タツセイ 步武 ホフ チ進 ス メ すすん 背面 ハイメン 攻圍 コウウ 軍 グン

不撓 フタウ ノ追擊 ツヒゲキ 耐久 タイキウ 封鎖 ホウサ 須 マツ テ

要塞 エウサイ 殲滅 センメツ 戰勢 センセイ 微功 コウ 約 ヤク

巨 ワタ リ。 傾注 ケイチュウ シ かたむけ 發揮 ハツキ シ ひろ 冠絕 クワンセツ シ ぐべんす 殉 ジュツ

難 ナン 戰局 センキョク 爾後 ニゴ 決勝 ケツシヨウ 機運 キウン 萌芽 ハウガ

整頓 セイトン シ さとの 傍 カタハ ラ。 包鎖 ハウサ シ ささみ 軍資 グンシ 國後 クナジリ

遮斷 シヤダン シ さへぎ 分遣 ブンケン シ わかち 威嚇 ヱカク ス おごし 宗谷 ソウヤ 國後 クナジリ

水道 スイダウ 捕獲 ホウカク 算 サン ス かぞ 出現 シユツゲン ス いであ 集中 シフチユウ 逸 イツ

勞 ラウ ニ乘 ジヤウ ス ほねをり 勇敢 ユウカン 加護 カゴ 著 チャク 著 チャク 著 チャク

功 コウ チ奏 ソウ シ てがらを 一舉 キョ の ひこたび 敵影 テキエイ 掃蕩 サウダウ シ はら

終結 シュウケツ ス おほ 制壓 セイアツ ニ歸 キ シ おもふま 負擔 フタビ ノ任 ニシ 務 ム

與 トモ ニ よし 攻略 コウリヤク 殆 ホトシ ド おほ 損 ソン セズ そこな 協同 ケウドウ



ノ任務ヲ果シニシム ちからをあはせる 脅威シケウ 依イ然ゼンリヤ 續ゾク行カウ

シおこなふに 休戰キウセン 復和フクワ 終局シュウキョク 維持ヰセリ

之ヲ要スルニツキスル 戰果センクワ 一貫クワン 經過ケイコウ 緩急クワンキツ 維持ヰセリ

難易ナンイ 差異サ 全局ゼンキョク 一貫クワン 經過ケイコウ 獲得カクトク 獲得カクトク

固ヨリもち 戰役センエキ 亡失バウシツ 戰利センリ 獲得カクトク 獲得カクトク

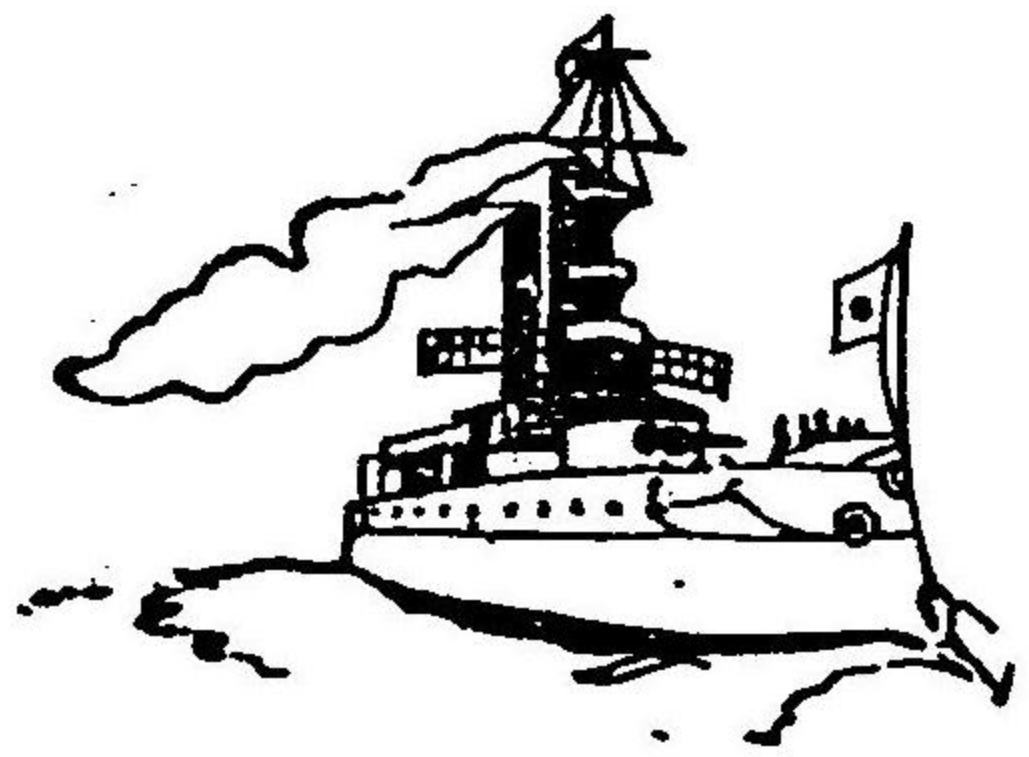
劣ラザルホ 保有ホウ 光榮クワウエイ 終ニ臨オハリ 臨リン 満マン

韓カン 朝鮮シヨウセン 效果カウクワ 餘利ヨリ 機關キカン 整備セイビ 活動クワツドウ

支助シジヨ 協力ケフリヨク 遺憾イカン 進歩シンポ 奉告ホウコク 奉告ホウコク

責務セキム 結了ケツレウ 奏聞ソウモン

高等小學讀本字引終





明治四十四年二月二十日印刷  
明治四十四年二月廿五日發行

(定價金拾五錢)

著者 新盛館編輯部

大阪市南區鹽町四丁目廿四番地

發行者 牧野勝太郎

大阪市西區靱南通二丁目廿八番地

不許  
複一製

印刷者 川原米三郎

大阪市南區鹽町四丁目  
渡邊筋北へ入

目 大阪市東區安土町四丁目 牧野新盛館

# 發賣所

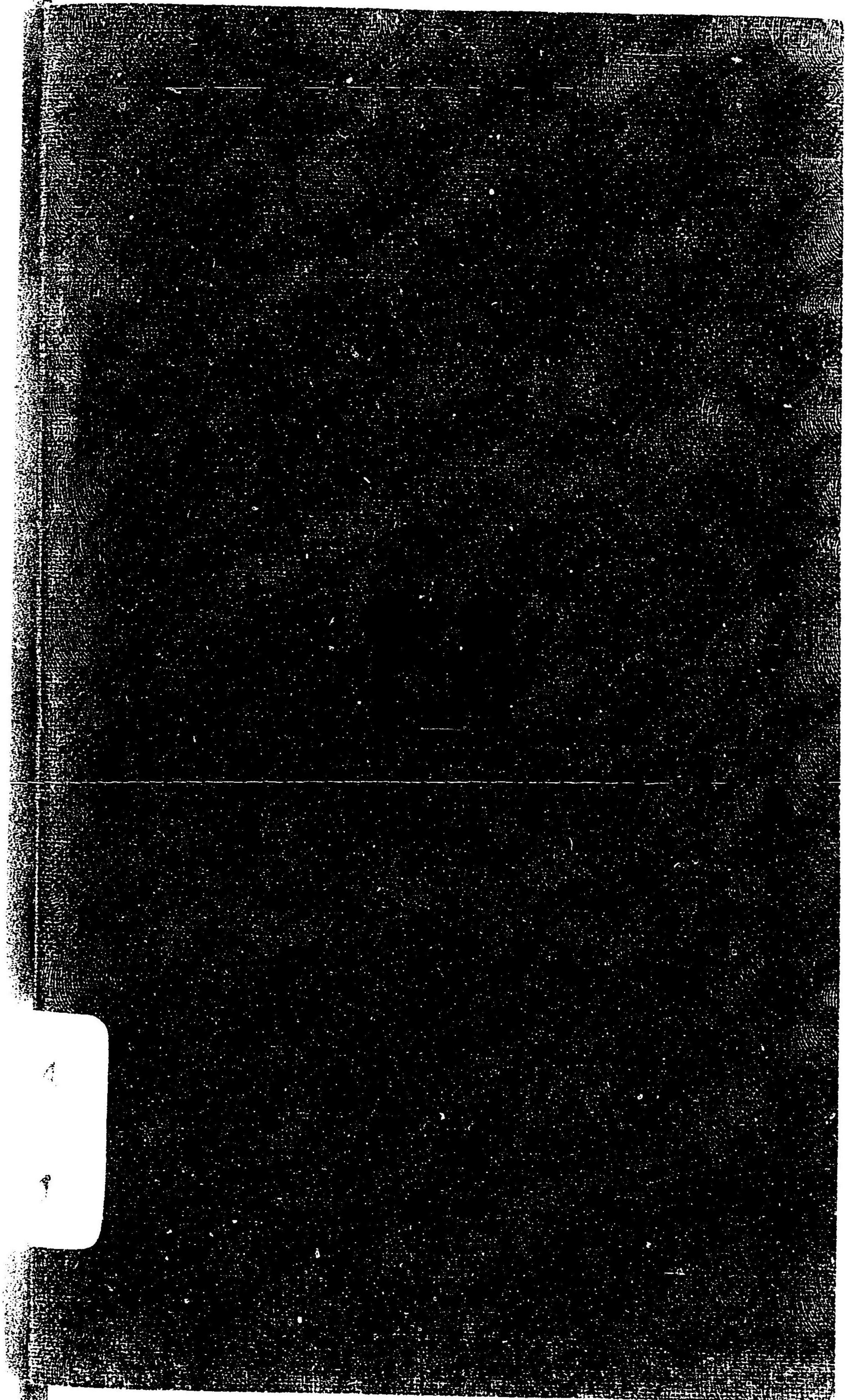
目 東京市神田區美土代町 武田交盛館

三丁目 富田文陽堂



3  
527







049204-001-9

特54-874

高等小学讀本字引 新制第3学年

牧野新盛館

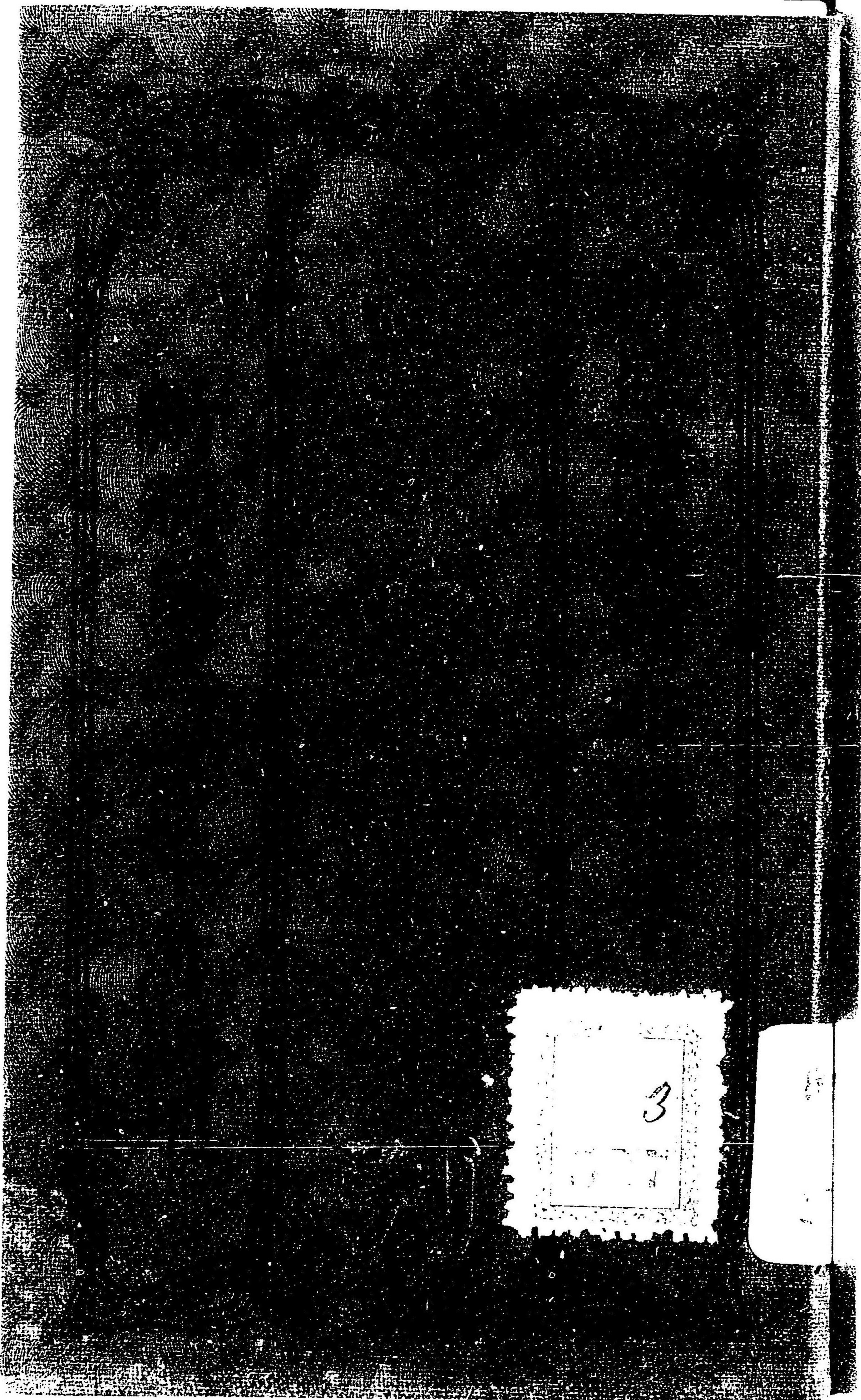
前

M44

BEL-0153







3

3



